

幸せな時間だった

加藤美奈

今まで生きてきた中で最も精神が削られ、学びに溢れ、価値のあり、そしてお腹を下した半年だった。半年という短い期間で、施設拡充チームのみんなに教わりながら、時にはぶつかるときもあったが、仕事仲間としての関係を最大限に築くことができた。どんな時でも彼らとの心のこもった明るい挨拶が関係構築の一番の鍵であったと思う。そして、与えられた仕事を最小限のミスで確実に全うすることで彼らの信頼を少しでも得ることにつながった。そうすると、インターンとしての仕事がスムーズに進み、最初の頃には一切なかった心の余裕がつくることができた。そのため全体を見ることができ、ケニア人の国民性や歴史的な背景にも関係する社会開発の厳しさを知り、しかしその中で、何も知らない自分が以前に描いていた草の根活動の理想とマッチするような活動を実際に行っている CanDo の現地の人々との関わり方や開発法に改めて共感し、現場に身を置くことで深い学びをすることができた。生活面で言えば、他のインターンとの共同生活も楽しかった。大変な時は、インターンなのにもかかわらずすごい仕事量と環境だな！と夜、行きつけの店で上手いチャイをすすりながら言い合っていたが、全てが終わった今となっては、インターンなのにもかかわらず、凄くそして立派な仕事をさせてもらうことができ感謝の気持ちでいっぱい。日本ではなかなか好き嫌いが多かったが、ケニアでの生活のおかげで嫌いな料理がなくなったり、皿洗いが喜びとなったり、パソコンを打ち込むスピードが大幅に速くなったり、この半年で初めて自分の将来のことを考え、将来は絶対異国の人々と英語で仕事をしたいという希望をもつことができたり。自分にとって今回の冒険は様々な面からして、大きな財産だった。暑いと嘆きたいほどの炎天の元で、学校の保護者が自分の子どものために、汗を大量に流しながら、そして笑いが飛び交わせながら、シャベルで材料を混ぜている姿は一生忘れたくない。自分が人の役に立っていると信じていることができる仕事が、最もやりがいにつながるのだと思えた。CanDo で学んだことを糧に、そんな仕事を私も見つけたい。